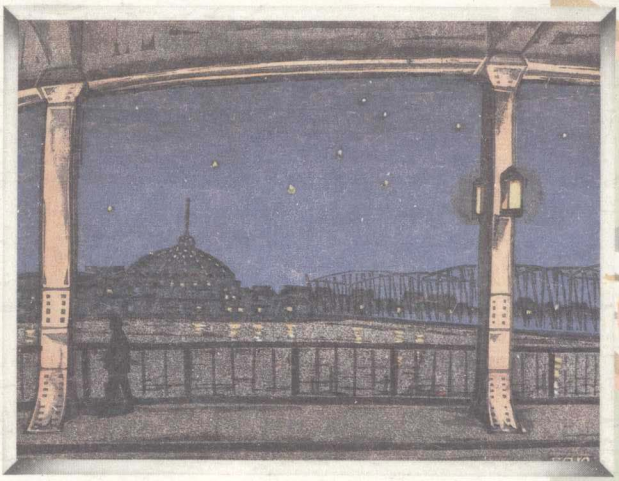
大正幻影

川本三郎



新潮社

大正幻影藏本三郎

江苏农业学院图书馆
藏书章

新潮社

大正幻影（たいしょうげんえい）

著者　川本三郎（かわもとさぶろう）

発行　一九九〇年一〇月一五日

三刷　一九九〇年一二月二〇日

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一
振替　東京四―八〇八

印刷所　株式会社光邦　製本所　株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Saburo Kawamoto 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-377601-3　C0095

大正幻影＊目次

川を渡って幻影のなかへ　7
1　ビーダーマイヤーのささやき　15
2　花の感受性　31
3　幻影の街　45
4　路地裏の散歩者たち　59
5　文士が映画と出会うとき　77

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

6 自己分裂という物語 99
7 「水の都」のユートピア 117
8 支那服を着た少女 133
9 異国への憧憬 149
10 南方の夢草 163
11 廃墟のなかの幻覚 179

12 病める名探偵たち 193
13 「紙上建築」の世界 207
14 神経衰弱と死 223
「幻影」を求めた大正作家たち 239
注 255
あとがき 260

大正幻影

川を渡って幻影のなかへ

はじめに隅田川があった。

四十歳を過ぎたころからなぜか無性に隅田川に心惹かれるようになった。隅田川沿いの町を歩くのが好きになった。

昭和十九年に東京の代々木に生まれ、戦後は杉並区の阿佐谷に育った人間にとってはもとより隅田川もその水辺の町も決して故郷ではない。自分の町ではない。にもかかわらずというべきか、だからこそというべきか隅田川とその周辺の町々が普通以上に新鮮に見えるようになってきた。都心の青山や六本木といった町にはなんの感興も湧かないのに、隅田川とその川べりの町に来ると落着きと安らぎを覚えるようになってきた。

川とほとんど縁のない西東京に生まれ育った人間には川と橋のある風景が単純に珍しかったということもある。また、ふだんの生活と直接には関係のない町だからこそ町内旅行者という異邦人の目で隅田川沿いの町をある距離を持って見ることが出来るというその距離感が心地よく思えたということもある。あるいはまた匿名願望といえばいいのか自己消滅願望といえばいいのか隅田川沿いの見知らぬ町の小さな路地などを歩いていると、自分がその穏やかな空間のなかにゆっくりと溶けていくような至福の一瞬を感じたことも事実である。

そして何よりも隅田川の「水」のゆらぎに心が誘われた。隅田川に架かる清洲橋や新大橋、あるいは小名木川に架かる万年橋、神田川が隅田川に落ちるところに架かる柳橋。そうした橋の上に夕暮れどきなどにひとり立って川の「水」を見ていると、自分がここではないどこかに連れ去られていくのではないかという軽い陶酔にとらわれたりした。梅雨のころ、朝早く微雨のなかの隅田川を浜町河岸から見ていると、自分が現代に生きていることを忘れたりした。

四十歳を過ぎてからまるで取り憑かれたように隅田川の周辺の町をよく歩くようになった。見知らぬ路地を歩いていると自分が別の時空に運ばれていくような錯覚にとらわれた。一時は路地にある家に引越そうと本気で考えたこともあった。しかし結局は断念した。本来の自分の故郷・居場所でもないところに住むのは不遜なことのように思えたからだし、すでに濃密な共同体が出来ているところに余所者が入り込むのはしてはいけないことのように思えたからだ。それに自分は結局はこの町では異邦人、ストレンシャーでしかないという異化意識、緊張感を失ないたくなかった。

そんなふうに隅田川とその周辺の水辺の町をひとりの〝訪れる者〟として歩いているうちに自然に昔、同じようにこの川べりの空間を愛した一群の文学者たちがいたことを思い出した。いうまでもなく永井荷風、芥川龍之介、谷崎潤一郎、そしてこの三人のように東京生まれではないが隅田川とは決して無縁ではない佐藤春夫らの大正期の文学者たちである。

文学史的にいえば彼らは自然主義文学に対する唯美派という共通項があるのだが私にはそれ以上に彼らは文学的空間として隅田川を愛したという共通項があると思えてならなかった。いわば唯美派ならぬ隅田川派とでも名付けようか。

永井荷風はアメリカとフランスから帰国したあと日本の性急な物質主義的な文明開化に異和感

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

を覚え、それに抗うようにむしろ文明開化からは取残されていく隅田川べりの下町を愛するようになった。とりわけ深川を愛するようになった。野口冨士男の名著「わが荷風」のなかの言葉を借りれば「その生涯を通じて彼がパリの次に最も愛したのは、深川といっていけなければ隅田川以東――げんざいの墨田区から江東区の一円にかけてではなかったろうか」。

日本橋蠣殻町に生まれた谷崎潤一郎、京橋区入船町に生まれ本所で育った芥川龍之介はともに幼年時代に隅田川のある風景を原風景に持った。谷崎潤一郎はたとえば「刺青」「秘密」「少年」で、芥川龍之介は「大川の水」「本所両国」でその原風景を書いた。二人の作品は隅田川抜きには考えられない。紀州新宮に生まれ、熊野川という大きな川のある風景のなかで育った佐藤春夫もまた東京に出てきて隅田川のなかに故郷の熊野川を見て「美しい町」を書いた。

大正期に文学的形成を遂げていった彼らは隅田川を文学的故郷、原風景に仕立てた。意識的にせよ無意識的にせよ彼らはその作品を隅田川の川のそばに置いた。川のなかに浮かべた。川の流れにまかせようとした。そこから淡い幻想性を帯びた作品が次々に生まれていった。

江戸は隅田川を中心に発達した水の都だった。明治国家はその水の都を破壊し、陸へ、山の手へと中心を移動させていった。「水の東京」が失なわれ「陸の東京」がとってかわった。明治国家を形成した世代を父親に持つ二代目である永井荷風や芥川龍之介らはおそらくそれに複雑な想いで反発した。富国強兵の国家の論理によって失なわれていった「水の東京」にこそ愛着を抱こうとした。彼らの隅田川への愛情は、明治国家の論理に対する反発、父の世代に対する抗いを含んだささやかな自己表現だった。このとき隅田川は現実の川である以上に象徴としての川に変った。大正期の作家にとっては隅田川は父の明治に対するかろうじての異和感の象徴となった。隅田川は「隅田川」になった。彼らにとっては現実の隅田川はたとえ近代化、都市化によって汚され、埋め立てられていく傷だらけの川であったとしても、言葉のなかではあくまでも美しく、や

さしく、無垢な川でなければならなかった。永井荷風も芥川龍之介も……彼らはいまここにある隅田川を見ながら実はいまここにない隅田川、あるべき隅田川を見ていたのである。その意味で彼らの隅田川を舞台にした作品は出発点から幻影性を帯びざるを得なかったのである。彼らはことさらに作品を幻想文学に仕立てあげる必要はなかった。失なわれつつある川、「隅田川」を描こうとしたその時点で彼らの作品は幻影性に包まれていたのだから。彼らが風景を発見したとき、その風景はすでに失なわれた幻景としての風景だったのだから。

私にとっても隅田川はそのように当初から幻影性を持った川だった。戦後に育った私はすでに隅田川が関東大震災によって、東京大空襲によって破壊され、さらに高度成長期の公害によって汚されたことをあらかじめ知っていた。だから、現実にどれだけ川べりの町を歩こうが、どれだけ隅田川を眺めようがそこにあるのは結局は隅田川ではなく「隅田川」でしかないということがわかっていた。だからこそ私のなかで「隅田川」に対する想いが増していったのだと思う。個人的に四十歳を過ぎてから東京のなかのいまをときめく町である青山や六本木などにいよいよなじめなくなってきたのと逆比例して「隅田川」のイメージが私のなかで大きくなっていった。青山や六本木に象徴される現代という時代に対する異和感が強まれば強まるほど「隅田川」という過去の幻影が大きくなっていった。

現実に隅田川とその川べりの町を歩いていると町のいたるところに永井荷風、芥川龍之介、谷崎潤一郎……の「記憶」が残されていることに気がついた。

たとえば水天宮の周辺を歩いていればその裏の陰翳ある路地が谷崎潤一郎の「少年」や「白昼鬼語」の舞台になっていたことに気づく。浜町河岸に出て隅田川の流れを見れば、谷崎潤一郎が「幼少時代」のなかで、あるいは芥川龍之介が「大川の水」のなかで、同じようにこの川の風景

を水の都ヴェネチアに見立てていたことに気づく。日本橋人形町の商店街にある大観音は谷崎潤一郎が幼少期に、その観音堂の屋根に飾られた見世物の人形が不思議にも動き始めたのを目撃した当の場所であることに気づく。浜町や人形町という町を歩けば歩くほど谷崎潤一郎や芥川龍之介という隅田川派の作家が私のなかで重要になってきた。「隅田川」を意識することで谷崎潤一郎の作品がそれまで以上に親しいものに思えてきた。

町と文学作品が重なりあう。町を歩いていると作品の「記憶」がよみがえる。作品を読むと町の（風景の）「記憶」がよみがえる。「隅田川」というキー・イメージを得たことで私のなかで、隅田川とその周辺の町が、そしてそこを文学的舞台とした谷崎潤一郎や芥川龍之介の作品が、以前にもまして身近かに感じられるようになってきた。さらにいえば青山や六本木に象徴される現代に対する異和感が昂じれば昂じるほど近過去としての大正期の作品と、その文学的風景としての「隅田川」がいっそう重要なものに思えてきた。

「隅田川」への想いは強くなる一方だった。人形町や浜町を毎日のように歩くようになった。隅田川にかかる清洲橋や新大橋を渡って深川へも足を伸ばすようになった。その際に永井荷風の「日和下駄」やその現代的ヴァリエーションである野口冨士男の「私のなかの東京」や「わが荷風」、あるいは浅草生まれの作家でつねに失なわれていく隅田川べりの下町を描き続けている芝木好子の「隅田川暮色」などが水先案内人になってくれた。

そのころから私はときどき日本橋蠣殻町のちょうど有馬小学校の前にある小さな、家族だけでやっているホテルを仕事場として使うようになった（家族だけでやっているホテルなので私はそこをひそかに〝ホテル・ニューハンプシャー〟と名付けていた）。週末になるとその小さなホテルに泊って永井荷風、芥川龍之介、谷崎潤一郎、佐藤春夫……の小品を楽しみながら読んだ。私にとってそれは黄金の時だった。自分が生きている現代のことをしばし忘れて過去のなかに遊ぶことができ

た。永井荷風の「濹東綺譚」の冒頭、「わたくし」は浅草のはずれにある裏通りの古本屋に入る。下町のひそやかな古本屋である。そして「わたくし」は、明治十二年の古書を手にしてこういう。「この時分の雑誌をよむと、生命が延びるやうな気がするね」。

私もまた有馬小学校の前にある小さな〝ホテル・ニューハンプシャー〟で荷風や芥川といった近過去の作品を読んでいると「生命が延びるやうな気がする」想いをした。そして本を読むのに疲れると近くの町を散歩した。そのホテルからは水天宮も大観音も清洲橋も隅田川も歩いて五分ほどだった。歩けば歩くほど「隅田川」が好きになった。

ある時、そのホテルから歩いて五分足らずのところに日本橋中洲（なかず）という町があるのに気づいた。隅田川が清洲橋のところで大きく曲がるところに三角形のような形をしてある。隣りはシティーエアーターミナルのある日本橋箱崎町と水天宮のある日本橋蠣殻町である。昭和四十五年に箱崎川が埋立てられて高速道路とシティーエアーターミナルが出来るまではこの町は三角形の島として隅田川に浮かんでいた。ここが佐藤春夫の大正八年に書かれた「美しい町」の舞台になった中洲だったのである。

中洲はそのころ隅田川に浮かぶ小さな島だった。日本橋のほうから中洲に行くには男橋、菖蒲（あやめ）橋、女橋という三つの橋を渡らなければならなかった。そしてこの中洲に清洲橋がかかっていて深川のほうに通じていた。（永井荷風は「深川の散歩」というエッセーのなかで深川に行くには中洲から清洲橋を渡って行くと書いている。）

佐藤春夫はこの中洲をユートピアの場所として選んだ。彼もまた「隅田川」に特別な想いを持ったからこそだろう。

そのことに気づいてから私はますます「隅田川」とその周辺の町に惹かれるようになってきた。町名でいうと日本橋人形町、浜町、蠣殻町、箱崎。そしてかつての中洲がいまやその周囲の川を

埋立てられシティーエアーターミナルと隣接するふつうの町になってしまったという事実を直視すればするほど「隅田川」の象徴性、大正文学の幻影性が際立ってきた。ここにある町を歩きながらここにない町が感じられるようになってきた。私もまた現実の風景を通して、現実には失なわれた風景、いやはじめから頭の中にしかなかった幻景を見たくなったのだと思う。

そして「隅田川」の周辺を歩くように私は大正文学の〝路地〟に入り込んでいった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c